

瓦^が谷^{こく}山^{さん}だより



vol.6

ご挨拶

「春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえてすずしかりけり」

道元禅師の歌です。冬枯れの季節を迎え、霜の降りる寒い日が続きます。四季はしばしば人生にたとえられます。生れ落ちて青春を経て壮年期へ、さらには老年期へと移行します。それぞれの季節に特徴があるように、人生にも青年期には青年期なりの輝きがあり、壮年期には壮年期の頑張りがあり、老年期には老年期の落ち着いた着きがあるはずです。また季節が毎年変わらず同じ姿を現すように、どんな人にも四季があり、それをたんとと生きる方が、自然の摂理にかなっています。青年でありながらやたら世間を憐み、僻んでやるべきこともやらずに無為に過ごすのはもったいないことです。老年期でありながら青年期を懐かしみ出来ないことばかり夢に描いて腐っているのもみっともないことです。

私も人生半ばにさしかかり、果物が熟すように老熟していけばいいなと思いますし、また柿の実が地面に落ちて腐って、霜枯れの雑草の中で土に返っていくように、人生の終わりが自然であり、すこしでも後世の肥やしとなるようにしていきたいとも思います。昔なら、農村で技術や自然の教えを次の世代に伝え、孫やひ孫に囲まれておいおいと枯れていくことも出来たかもしれないが、核家族化した現代の状況ではそれはたやすいことではありません。幸いに自然の中に暮らす機会を得たので、すこしでも自然から学び、自然の姿を参考に人生を歩んでいきたいと思っています。

発行日 2007年12月吉日
発行人 (宗) 真光寺 岡本和幸

印刷 現代社
編集 (宗) 真光寺

問い合わせ先
(宗) 真光寺
TEL 0438-75-7414

さて真光寺の伽藍建築は、建設を請け負った会社が十月一日に破産申請し、工事の遅れが出ています。激動の一ヶ月でしたが、幸い関係者皆様にご理解、ご協力いただき、新たに(株)現代製作所に工事を依頼、十一月より工事を再開することができました。完成は平成二十年三月を予定しておりますが、境内、庭の造成などすべての工事の完成は平成二十年度いっぱいかかる見込みです。ご迷惑をおかけしますが、ご理解ご協力賜りますようお願い申し上げます。

「人生山あり谷あり青山あり」紆余曲折、行き違い、いろんなことがあります。自然に、自然に努力を重ねていきたいと考えております。

檀信徒の皆様が明くる年がすばらしい歳となるよう祈念します。明年もよろしく願います。

合掌

住職 岡本和幸



開創四百五十年記念事業

◆ 伽藍建立工事の現状報告 ◆

建設を請け負っていた（株）しゃじが十月一日に破産申請を致しました。地元新聞記事によると、負債総額は約三億円にのぼる模様です。当山も建設請負契約に基づき、相手方代理人弁護士と協議をしておりますが、先ずは一日も早い工事の再開、そして完成を目指さなければいけないと奮闘して参りました。

幸い材料納入各社、下請け各社のご理解を頂き、今後の工事にご協力を頂けるとなりました。更に（株）現代製作所が継続工事の元請けをお引き受けいただける事となり、一ヶ月程度の空白で工事を再開することができました。

皆様には大変なご心配をおかけ致しておりますが、より一層の努力を重ね、工事完了まで突き進んでいく所存ですので、今暫くのご不自由をお許し下さい。

■ 方丈内部（左上）

床張りが始まりました。根太を等間隔に渡していきます

■ 方丈内部（左下）

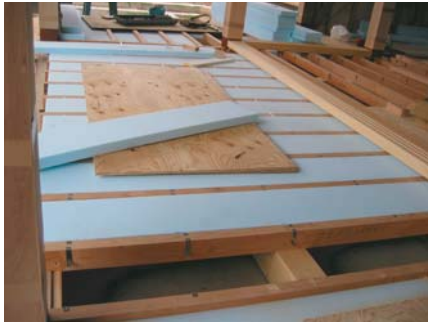
根太と根太の間に断熱材を入れていきます。硬いスポンジのような材質で、カッターで成形していきます

■ 方丈（右上）

屋根瓦も葺け、足場も外れました、大きくなだらかな稜線は日本建築の最も美しいところです

■ 廻廊（右下）

工事手順の関係で後回しにされていた部分が着工しました。これでもう重機は中庭には入れません



■ 森の苑の花々（右）

ホトトギス（上）

ツワブキ（下）

■ 桜の苑（左上）

正面に3基の墓誌が並び、手前には献香台と献花台が並びます

■ 桜の苑（左下）

寄進されたレンガでの舗装作り

墓誌が完成しました。約2m×1.5mの青御影石の石盤に、約5cm×10cmの俗名を刻んだプレートを設置します。また、更に大きな桜も数本植える予定であります。

◆ 桜の苑 ◆

里山葬に植樹された木々は古いものでも三年程度しか経っていません。元々大きな木だったものを移植したものもありますし、苗木も多くあります。十年位はかかるでしょうか、緑溢れる里山の風景となるのには。

「自然の中で眠りたいというニーズにも応えられるし、後世に生態系の機能した里山を残すこともできる」（同紙記事より抜粋）

と題され、住職のコメントも記載されています。

十一月二二日の読売新聞夕刊トップ記事に真光寺の里山葬墓苑が掲載されました。

◆ 里山葬墓苑 ◆

※縁の会会員は、十一月現在で十四区画、二十三名となっております。



宮大工さんインタビュー ～後編～

寒さも厳しくなり、風邪が吹き抜ける中で働いている宮大工さん達。前号のインタビューの続きです。

※熊は熊谷さん・藤は藤井さん・兄は佐々木お兄さん・弟は佐々木弟さん
本文ではなるべく語り口調（秋田弁）を表現しようとしていますが、一部標準語訳をしています。（笑）（敬省略）

※前号では「藤井さん」を間違えて「杉山さん」と紹介していました。ここにお詫びと訂正を申し上げます。

Q・今までで大きな怪我をしたことありますか？

兄・ない！（一同笑）

藤・ないことにしておこう。（笑）

Q・例えば足場から落ちたとか、？

藤・高いところ登ると最初からおつかねえもんだから、気をつけるからなあ。おつかなくない人はシートと一緒に落ちたことあるなあ。屋根張ってて、途中からシート張ってて屋根あると思って歩いていたらシートしなくて落ちてったけど。

Q・一般の住宅とお寺などの社寺建築の違いや、社寺建築ならではの誇れるところは？

藤・ふつうの住宅はもって二十〜三十年、お寺は百年は持つしな。重要文化財になる可能性もある。（笑）

Q・耐久年数の違いはやはり作り方の違いですか？

藤・材料でねるか？普通の家っていえばそんなに太い柱使わねーしな。すべてが太いんだよなお寺の場合は。こんな太い柱（直径約三十センチメートル）使うのはまず珍しい。

Q・普通の家の柱はどの位？

藤・十センチから十二センチ位。

Q・組み方も違います？

藤・設計によってな。普通の家でもお寺みたいに作ることあるから。

兄・でも今は細い材しか取れない。

藤・（太い木は）使い果たしてしまっただから。

兄・だってえ、使えるまで何百年かかるべ？

Q・使って、植えたりしてこなかったんですか？

兄・植えたって新材で誰も買う人なんていない。普通の住宅だってないわけよ。山にすごい大木がよお、あったけどみーんな倒してしまっただ。

熊・太いのあっても、国有林とかで伐採されない所が多いからさ。

Q・伊勢の神宮で（技術継承のために）二十年に一度建て直してますよね？あれは国有林から？

熊・あれは神社の山というかそれ用の山があって、全部管理してる。使ったら植えてる。

Q・みなさん、好きな木はありますか？

全・檜がいいなあ。においと肌がいい。

兄・油が出るからよお、腐れねえんだ。

藤・米杉アレルギーなんだ、俺な。（笑）

兄・米杉をよ、製材すると粉が鼻に入っていらいらする。目にもくるしよ少しならいいけど、米杉の中で仕事していると鼻つまって花粉症と同じようなもん。

Q・米杉以外の木でも粉が入ったりしないのですか？

兄・米杉特有の匂いするもんなあ。香りが強い。

Q・米杉って柔らかいんですよね？

杉・んだ。

Q・この辺の杉は南部杉。温暖なので成長が早い。年輪の幅が広くて柔らかくて建材にむかないって言われてる。米杉と似たような感じかもしれないですね。

藤・半年止まってるからなあ、寒いところはなあ。雪積もってるからその間に固くなってくる。

兄・厳しいとこで育ったのは丈夫だけど、俺らみたいにはやばやに育つと○×▲□◆×（強度の秋田弁？のため聞き取り不可）

熊・ほらまた、まるさんかくばつしかくで書かれっぞお！（一同爆笑）



■右手前から藤井さん、佐々木さん（兄）、佐々木さん（弟）、熊谷さん、大西さん。
休憩中にお邪魔してお話させてもらいました（8月撮影）

職人さんといえば、、口数が少なくて気むずかしいという勝手な先入観がありました。皆さんとてもやさしくお話してくださいました。ありがとうございます。伽藍が完成する日を楽しみにしています！

行事報告

◆ 秋期彼岸会法要 ◆

彼岸会は昼夜の時間がほぼ同じになる春・秋分の時期に、今日ある自分を育ててくれたご先祖様に感謝するとともに、日々の忙しさから離れ、自分自身の仏心を見つめ直し仏道に精進する修行期間です。中国から伝わってきましたが（もともと中国では心に浄土を思い描き極楽浄土に生まれ変わることを願ったもの）、日本に伝来後いつの間にかご先祖をまつる行事へと変化していきました。ちなみに日本で初めての彼岸会が行われたのは八〇六年だそうです。

そして彼岸法要定番の落語です。落語家は金原亭馬吉さん。本堂が笑いに包まれた和やかな時間でした。この馬吉さん、普段の会話の時も落語口調で、ご自身のことを「あつし」と言われるなど落語家らしい落語家さんでした。



■法話をする住職



■彼岸会定番の落語会

落語家の金原亭馬吉さん。右は落語が盛り上がった頃にやってきたモコ（寺猫）馬も猫にはかなわなかった様でした（笑）



◆ 七日法要 ◆

十月に一回目の縁の会『七日法要』が行われました。縁の会とは将来終の住処である「里山葬墓苑」という縁によって結ばれた人達が協力して護持しともに供養しあうことを意図しています。毎月七日に行われる七日法要では授戒式とその月に亡くなられた方の供養を行います。また季節に応じた行事も行います。（明年は七日前後での土日開催を増やします）

◇ 十月の七日法要「収穫祭」 ◇

午前は授戒式が行われました。まだまだ会員数が少ないながらも、数組の会員の方が参加し、無事に法要を行うことができました。昼食は真光寺で育て収穫した新米をお釜で炊き、芋煮汁と秋刀魚を焼いて青空の下でいただきました。

◇ 十一月の七日法要「植樹祭」 ◇

この日は平日ということもあり参加された方はお一人でした。はるばる遠方からいらしてくださいました。昼食は皆で餃子を作っていただき、午後は里山葬墓苑にてケヤキ、クヌギ、イロハモミジ、コナラ、山ツツジ等を三十分ほど植樹しました。

■ 植樹風景

穴を掘り堆肥を混ぜ込んでから苗木を植えます



■ 植樹風景

将来の終の住処に一本一本木を植えて森をつくりまします。森になるまではまだまだ時間がかかりますが、。少しずつ成長しています。



■ 植樹祭

昼食の餃子作り

生地は前夜に仕込んでおき、皆で生地をのばして具を詰めるところからやりました。生地がたくさんありすぎて、大変でした。（笑）



里山再生活動

◇通える田舎◇

四年目に突入した里山再生活動のお米は昨年の二倍にあたる二トン！の量のお米が収穫できました。

今年の夏は草取りが予定道に行えなかったこともあり、稲刈りの時には大きく育ったコナギ（田んぼに生える草）のせいではなかないうまく稲刈りが進まず苦戦しました。昨今、世間では安全性、環境問題の面からも無農薬の作物を求める人たちが増えているようですが、無農薬で行うことがどれだけ手のかかることか（専門でやられている農家さんの大変さなど）痛感しました。収穫量とともに生き物の数と種類も格段に増え、年々見るからに増えていく虫を見て上田さんも嬉しそうです。

来年は減科学肥料にチャレンジしたいと、十月にレンゲの種を蒔きました。田植え前の田耕しの時に土にすき込み肥料にします。冬の間は手前の谷（馬瀬戸谷）の梁に生い茂った笹と葛を刈り払い梁の整備をします。来年はまた一段と開けた明るい谷津田になることでしょう。

幸い今年はイベントでも参加者が増えてきました。最近では農業を体験してみたいという若い人が多くなっているようで、二十〜三十代の都心で働く方の参加が目立ちました。今年一年の参加者は四十七人（延べ参加人数は百四十四人）でした。何度も来て頂く方も多くなり、「気軽に通える田舎」として定着していくことを目標に、来年も活動が続けていきます。

◇参加者アンケートより◇

参加したことによって日常の中で何か変化はありましたか？

- 一週間くらいは元気で過ごせる
- 日本の農業が気になる様になった
- 米の味を気にしながら食事する様になった
- 食べ物に対する考え方が変わりました
- お茶碗の米粒を残さず食べるようになった



■手前の谷（馬瀬戸谷） 手前はタコノアシ。左側の梁を整備しています



■鎌で稲刈り
人手というものは偉大です



■稲のはざがけ
懐かしい風景
稲刈り後にこの作業は結構きついです。



■「稲刈り」集合写真
一仕事したぞ！！といわんばかりのガッツポーズ（笑）



■伝授
お米作りの先輩である檀家さんにコンバインの操作を教わる住職



■水路で発見！
左上から時計回りにスズエビ、ヨシノボリ、ヒメダカ、タイコウチ



■「収穫祭」にてお餅つき ほくほくのお餅をいただきました



■千葉県曹洞宗青年会の稲刈り
このお米は児童養護施設「野の花の家」に寄付しました



■「収穫祭」にて休耕田の開墾
来年は田んぼになるのかな？

道元禅師「学道用心集」に学ぶ

真光寺住職

岡本 和幸

観無常心

真光寺が所属する曹洞宗では、永平寺を開かれた道元禅師さまと、鶴見の総持寺を開かれた螢山禅師さまを両祖として仰いでいます。

永平寺を開かれた道元禅師は、膨大な書物を書き残しています。その中に「学道用心集」という書物があります。これは仏の道を学ぼうとする者の心得のような書物であり、道元禅師の宗教が如実に現れている書物でもあります。

学道は学びの道と書きます。人はなぜ学ばなければならぬのでしょうか。人として生まれ、いずれ死なねばならぬ以上、少しでも充実した有意義な楽しい人生を送りたいと願うのは当然の事でしょう。学びの道はすべて、人間としての充足した日送りのための道といえます。「学道用心集」は仏の道、ひいては人としての幸せと充実の日送りの心がけを説かれたものです。

そこで「学道用心集」の中の道元禅師の言葉をひきながら、私たちの生活に生かしていくお話を本誌上に連載していきます。

「学道用心集」の第一は「菩提心を発すすべきこと」とあります。菩提心というのは、仏のような生き方を願う心です。それはどのような生き方かというとはからい、こだわり、苦しみのない、清々しい生き方です。仏のようになりたいとか、仏のような生き方をしたいとか、仏の道を学びたいとか、もつといえはいい人生をおくりたいとか、幸せになりたいとか、そういう願いの心が菩提心であり、また今のままではいけないと感じるのも菩提心です。

道元禅師は菩提心にはいろいろの言い方があるけれども、無常を観ずる心もその一つだとして、「無常を観ずるとき 吾我の心、生ぜず。名利の念起こらず。時光の速やかなることを恐怖す」とお示しです。人が無常を観ずるとき、自分だけというエゴや、名誉や富を求める心などは起こることはなく、ただ時の流れの速さを恐れる、という意味です。

無常というと、「祇園精舎の鐘の音、諸行無常の響きあり」という「平家物語」の冒頭の言葉を思い出します。この一節は、人の世の栄枯盛衰をうたっているという理解が一般的ですが、それだ

けにとどまらず、この世のありとあらゆるものは、時の流れとともに絶えず変化を繰り返しているというのが無常の本当の意味です。この無常を観じ、願いの心つまり菩提心を起こすことが、充実した毎日を送るための第一歩となるのです。

お釈迦さまの伝記の中に、「四門出遊」というお話があります。お釈迦様が若い頃、お城の四つの門から町に出て、人が死んで悲しんでいる姿、病に苦しんでいる姿、老いて苦しんでいる姿、人と人が争い傷つけ合っている姿を目の当たりにされ、それがお釈迦さまに出家を決意させたというお話です。

また、道元禅師は三才の時に父を、八才の時に母を亡くされました。母の前に供えられたお線香から立ち登る紫の煙を見て、道元禅師は出家を決意されたと伝えられています。お釈迦さまも道元禅師も、人間は何故生まれてきたのだろう、何をすればよいのだろうというという疑問に対する答えを求められました。つまり、仏教はうつろいゆく無常の時の中で惑う、人間の宿命によってできあがってきたといえると思います。

私事ですが、私は五才で父を亡くしました。当時の事は全く憶えていませんが、火葬場のお骨上げの時に父の骸骨を見たことは忘れられません。当時の火葬は夕方に火葬場に遺体を預けて、次の日の朝お骨上げに行きました。ゆっくりと焼くので骸骨などそのままの形でお骨上げということも多かったと思います。よく憶えていない中で、釜から出てきて骸骨が乗っている情景だけは忘れることができます。

父が亡くなった一年後に祖母が亡くなりました。この時は猛烈に悲しくて悲しくて、その時の悲しみだけをよく憶えています。父と祖母とたった一年の違いですが、父の死で死ぬということがどういうことであるかわかって、それが祖母の時には悲しみとなって現れたのだと思います。こんな体験はだれしも持っていると思いますが、それを現実として受け入れ、死という立場から人生を考え、日暮らしをしていくことが、今の私たちにとって必要なことではないかと思えます。

無常という観点から、現実の私たちの生活を見てみると、たとえばけんかをして、「今度会ったらあやまろう」とか、「この仕事は今度やればいだろう」と、日常の中で「今度」ということはたくさんあります。しかし、その「今度」ということがないとなればどうでしょうか。けんかをしている暇はありませんし、今できることは今やらなければなりません。

たとえば、子供の教育を考えてみても、今の社会においてはよい会社に入るためにはよい大学に入らなければいけない、だから勉強をするのだという考え方が一般的だと思います。会社に入っても、将来出世するために一生懸命働くという考え方が主流です。いずれも将来があるという前提に立っていますが、世の中は無常ですから、よい学校に入ってもよい就職ができるとは限らず、また大企業でも倒産してしまうかもしれません。ましてや明日の命さえ保証されていないのです。今、子供たちに教えないといけないのは、自分の持っている疑問の答えを見つめる楽しさや、貴重な

青春をどう生きるかということなのではないかと思えます。そのように、刻々と移り変わってどまることのない時を有意義にすごしていくための第一歩となるのが観無常の心なのです。

癌でご主人を亡くされた方とお話をする機会がありました。まだお若く、子供さんは高校生と中学生でした。この方は、「私たちは病気を知ってから、本当の夫婦になりました」といわれるのです。それまで自分たちはごく普通の夫婦だと思っていたこの方が、ご主人の病気を知らされてからは、病院の小さなベッドに寝泊まりして、ご夫婦でお互いの考えや子供たちの将来や、出会ってからの思い出など、いろいろなことを話し合いました。そしてもしあの世があるのなら、そこでも夫婦になろうと誓い合ってご主人を送られたそうで、いつもそばで見えていくような気がしています、といわれます。

口うるさい女房でも、また明日もいるのだと思うから安心なので、たった今死んでいなくなってしまうかもしれないと思えば、切ない気持ちになります。無常を観ずると、今遭う人、今遭う物のすべてがよいとおしくなります。そしてじぶんの限られた時間がいいとおしく大切に思え、おのずと自分自身も大切に思われてきます。

「お寺は無常無常と、死ぬことばかりいうから嫌だ」という方があります。しかし無常を観ずることを負の意味にとらえるのではなく、充実した楽しい毎日を送るための秘訣と考えれば、そこからまったく違う物が見えてくるはずです。

日常の中の仏教

三昧 うさんまい

世間ではグルメ三昧、贅沢三昧、読書三昧・・・とその事に明け暮れている様子を「〇〇三昧」といいます。この「三昧」、もともとはサンスクリット語（古代インドの文語）の「サマーディ」を音訳したもので、古代インドの瞑想法・ヨーガからいうまれば仏教に伝わりました。「サマーディ」の意識は「定」で（「禅定」ともいう）、精神集中のはてに心がひとつのところに定まり動くことが無くなった状態をいいます。心が静まりかえった状態とでもいうのでしょうか。

禅宗の修行では来る日も来る日も坐禅三昧、掃除三昧の日々を送るそうです。今行っていることに全身全霊で集中して日々を過ごす。私たちもどうせ三昧するのなら修行するつもりで臨みたいものですが、なかには健康を害する三昧もあるので気をつけたいものです。

※サンスクリット語は梵語ともいい、その文字を梵字といいます。梵字はよく塔婆や墓石に刻んである何やら暗号のような文字です。

行事予定

「檀信徒」

●修正会法要

平成二十年一月三日（木）午後二時より

年頭のご挨拶と一年間の多幸を祈る法要を致します。法要終了後はけんちん汁をいただきます。懇親を深めたいと思います。時勢により酒類はお出しできませんのでご了承ください。

●春季彼岸会法要

平成二十年三月二十三日（日）午後二時より

彼岸にあたり、各家のご先祖様の供養を致します。卒塔婆による供養をご希望の場合は、あげる方のお名前と、先祖代々または戒名にてのご供養をお知らせいただき、お電話でお申し込み下さい。法要後、外に出して下さいますので、お墓参りの際にあけて下さい。また法要終了後は落語会を行います。

●婦人会ご詠歌練習日

一月 八日（火）・二十二日（火）

二月一二日（火）・二十六日（火）

三月十一日（火）・二十五日（火）

各回 午後七時半より真光寺本堂にて

（どなたでも飛び込みで参加できます）

●お寺掃除

○五月十一日（日）表場下

○七月六日（日）新田

○八月三日（日）その他

「縁の会会員」

●七日法要 季節の行事予定

「修正会・年頭祈禱」（お札を配ります）

平成二十年一月六日（日）

午前 授戒式・一月月供養

昼食 皆さんとお雑煮を作ってください

午後 自由行動（里山散策・お墓参り・地域の神社詣）

「涅槃会・節分法要」

平成二十年二月三日（日）

午前 授戒式・二月月供養

昼食 皆さんと豆料理などを作ってください

午後 自由行動

「春季彼岸会法要」

平成二十年三月七日（金）

午前 授戒式・三月月供養

昼食 春の山菜料理

午後 山菜採りに里山を歩きます

*昼食準備の都合上ご出席いただく場合は必ずお電話

又はメールにてご予約ください

*電車での参加の方には送迎を致します。

（要申込み・内房線姉ヶ崎駅改札口 午前一〇時集合）

申込み先 TEL 0438-75-7365 ennokai@shinko-ji.jp

今年度の七日法要はなるべく土日開催するように致しました。各月日にちが異なりますのでご注意ください。また、四月の植樹祭は四月六日（日）に行います。

「里山再生活動」

「開墾」

日時 三月十五日（土）・十六日（日）

内容 田圃の整備など

集合場所・時間 真光寺・一〇時

*電車での参加の方には送迎を致します。

（要申込み・内房線姉ヶ崎駅改札口

午前九時三〇分集合）

費用 一泊二日 六千円（保険代・食費含む）

特典 参加回数当たり二キログラムの新米を

差し上げます

服装 動きやすく、汚れても良い服装

申込み方法 satoyama@shinko-ji.jp

又は

FAX 0438-75-7630 までお申込

み下さい

尚、参加申込みは三月十日（月）へ切とさせていただきます



ーお知らせー

今年収穫したお米は完売しました。お買いあげくださった皆さま、ありがとうございました。

お寺のブログ 【瓦谷山だより】

<http://sinkoji.cocolog-nifty.com/news/>